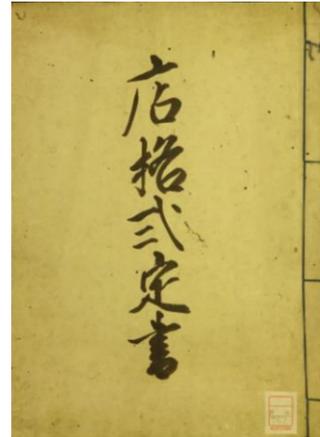


## I 商家「中屋」の成長と繁栄

戸谷家初代光盛は、正徳5年（1715）、12歳の時に、伯父奎兵衛が勤める江戸の中屋勘兵衛店に奉公に上がりました。その後、享保18年（1733）に本庄に戻り、中屋勘兵衛店別家「中屋半兵衛店」の名を掲げ、本庄宿新田町に店を構えました。創業当初は太物（綿や麻の織物）や小間物類を扱い、商売が軌道に乗るにつれ、資産を増やし、光盛の時に中屋の基礎を築きました。



判取帳（戸谷家文書 90）



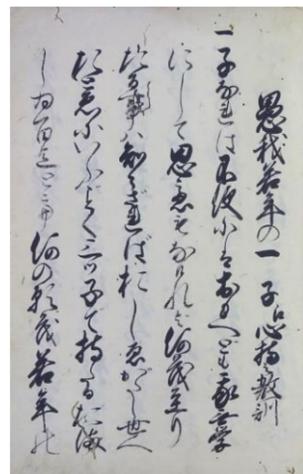
店格式定書（戸谷家文書 767）

戸谷家では、大福帳や店卸帳をはじめ様々な帳簿を作成しました。手代や奉公人の経歴を書いた人別帳は人事に関する記録です。

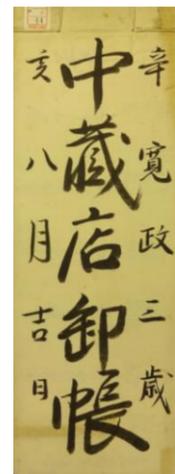
初代光盛は、遺言状に、親孝行や商売のこと、商人道徳などの教訓を記しました。中屋では、天保6年（1835）に定法帳を作成し、手代として守るべき心構えが示されました。



大福帳  
（戸谷家文書 101）



遺言之状  
（戸谷家文書 772）



中蔵店卸帳  
（戸谷家文書 44）

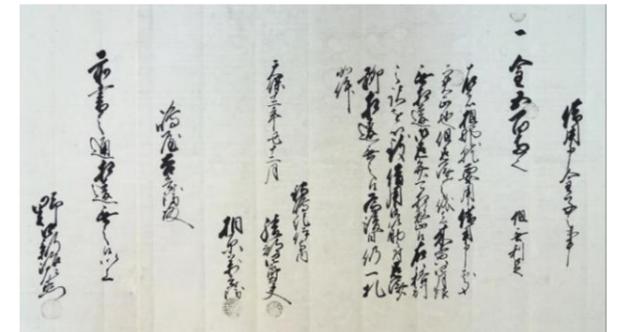
## II 「中屋」の金融と社会活動

中屋は18世紀中頃までに急成長しました。初代光盛は、宝暦13年（1763）に江戸日本橋室町（室町店）に、三代光寿は、文化2年（1805）に神田橋御門外三河町（神田橋店）に新たに店を設けました。

また、文化4年（1804）には、大坂の本両替炭屋安兵衛から為替金銀の取引を請け負うようになりました。文政2年（1820）には勘定所で新吹金引替御用を、翌年には新吹銀引替御用も拝命しました。順調に商売を広げ、経営も安定した中屋は、文政期に入ると幕府の政策に関わる事業を請け負うようになり、扱う金額も大きくなりました。また、柳河藩（現福岡県）立花家、小城藩（現佐賀県）鍋島家、富山藩（現富山県）前田家などに大名貸を行いました。



一分銀包紙（戸谷家文書 4750）



借用申金子之事（戸谷家文書 1647）

商家として繁栄した戸谷家の歴代当主は、数々の慈善事業を行いました。中でも有名なものは「神流川の無賃渡し」です。神流川は武蔵国と上野国の国境を流れる川で、当時、川を渡ることをめぐって、数々の訴訟が起きていました。初代光盛は、幕府に「神流川を渡る人々から通行料を徴収することなく、無料としたい」と願い出ました。その結果、光盛は合計200両を幕府に預け、その利息30両により神流川の渡しを運営されたため、通行料を取ることなく、川を渡ることができるようになりました。



溪斎英泉画「支蘇路ノ駅 本庄宿 神流川渡場」  
（埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵）



神流川無賃高札  
（戸谷家文書 8065）